Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

<研究>貨幣論上に於ける金屬主義と名目主義

宮田, 喜代藏

(Citation)
經濟學商業學國民經濟雜誌,32(1):109-125

(Issue Date)
1922-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053393

KOBE UNIVERSITY

貨幣論上に於ける金屬主義と名目主義

名古屋高等商業學校講師
商學士　宮田喜代藏

一

經濟學理の使命は經濟生活の機構を統一的且組織的に表明し說明するにある。經濟理論は經濟現象の認識及び說明に對する補助手段にして、嘗て正當なりし學說も現在の經濟生活に適應せざるに至れば其現象をよりよく說明し得る他の學說に其眞理たりし地位を讓らねばならぬ。

經濟生活の實際は日に維れ新たなる現象を展開して居る。然るにこれが說明を任務とする經濟理論に於ては、自然科學に於けるが如く學理の眞理を檢證するが爲めに一定の條件を抽象して人爲的に觀察實驗を行ひ得ざる爲め、傳統的な直觀が充分なる檢覈を經ずして無批判に受け容れられ、誤謬と成りし學理も久しく眞理たるの位置を墨守することが稀でない。從て新しき學理の眞理が其意義を正當に認識せらるゝが爲めには久しき忍耐を要し、こゝに實際と理論との矛盾の悲哀が感ぜられなければならぬ。此意味に於てゆくりなくも經濟學の爲めに實際の實驗室を現出したる歐洲大戰亂は經濟學理の眞理性を驗證すべき未曾有の好機であり、戰爭經濟の供へた汎ゆる現象を眼前に有する今日こそは經濟學說の價値を先入見なく批判すべく與へられた審判の日であらねばならぬ。

二

貨幣論に於ては金屬主義的學說は純理論に於て並びに實際政策の根底に於て無上の眞理として久しく承認せられて來た。然るに近時に於て貨幣現象の事實と金屬主義的理論との矛盾は端的に暴露せられ、殊に墺太利に於ける紙幣本位に對する注意深き觀察は通說たる金屬主義の無條件的な眞理性に疑惑を齎らし、其確固たる地位に動搖を釀したるは疑を容れない。

此時に當りクナップの貨幣國定學說は現はれ、彼の犀利なる觀察によりて貨幣制の名目的本質は洞察され金屬主義を以てして解明し能はざりし貨幣現象殊に墺太利の紙幣本位は初めて闡明せられ貨幣學說は新しき局面を展開した。此國定學說の現出と共に貨幣の研究は久しき沈默を破りて驀然として起り、貨幣學說史に於て未だ見ざる喧しき論議が新說を中心として爭はれた。併し乍らクナップの新說に對する批判は當時にありては多く反抗的であつた。而して『人々はこの勞作が時代を劃するに足るの意義を有し、これによりて數百年の廢趾は取去られ只經濟的考察の完足によりて一層完全なる形に發達することを必要とするものなるの理を看過し、この學說が法律的獨斷的に偏したるの故を以て其の提供したる眞理を受容るゝ代りに古き誤謬に欵を通じた』[1]。かくて其後戰爭の開始に至る迄クナップの新說に對する論評は絶えず繰返され、而も只熱心なる小數の祖述者の信奉を得たる外そが偏法律的なりとの根據より容易に敬遠され、金屬學說は傳統的な經濟學の基礎の上に安じて泰平を夢みることが出來た。かくてクナップの國定學說の眞理が正當に認識せらるゝが

爲めには世界大戰による審判の日を待たねばならなかつた。而して遂に試さるゝの日は到來した。

一名目論者は曰ふ「事實は言葉以上に有力である。戰爭は學問上に於ても金屬主義に終焉を告げしめた」(2)。他の名目論者は曰ふ「偉大なる敎師たる戰爭は又貨幣に關する吾々の直觀を根底から顚覆した。戰爭經濟の財政的現象は從來一般に普及して居た金屬主義的貨幣學說を以てしては到底說明すべくもない。戰時狀態の印象の下に貨幣問題を根本的に說明する學者は或は金本位の支持すべからざることを結論して從來の金理論的直觀の上に築かれたる貨幣の實際を名目主義的に根本的に改造するに到るか、然らずば彼等の金屬主義的な根本的見解に著しき制限を加へて古き正統的金理論を跡方もなき迄に到らしめねばならぬ。クナップの貨幣國定學說は一般的な承認を得る爲めにこの世界大戰を待たねばならなかつた」(3)。誠に戰爭開始以來現はれた貨幣理論に於て、更に實際の國家政策の上に於てさへも金屬主義的見解の凋落は顯著な事實として現はれ、戰時及び戰後の財政を論ずる者貨幣制度に關して提議する者の著しく名目的傾向を帶ぶるに至りしは見易き事實である。勿論一般經濟學說の基礎付けの上に久しく全盛を誇りし金屬學說はその正統的な經濟學說の一般に普及する限り尙ほ全然覆されたりと言ふことは出來ず、理論及び政策の上に於て一勢力たるを失はない。庶幾貨幣論上に於て名目主義的見解は金屬主義に對立して一大勢力たるに至りしは否むことが出來ない。今や金屬主義と名目主義の對立は顯著なる事實として現れ、兩主義は試みらるべく審判に立つて居る。然らばこの金屬主義及び名目主義とは果して何を意味し、如何なる特質を有するものであるか。

三

金屬主義 Metallismus 又は金屬論者 Metallist なる名辭はクナップが其「貨幣國定學說」に於て反對論者を表示する爲めに用ひたるに始まる。クナップは貨幣に對する正當なる認識は法制の觀點より考察する時初めて得らるゝを主張し、而して其他總ての國家法制に觀點を置かざる貨幣論者を包括して金屬論者と言て居る。彼は劈頭の序文に曰く「國家なき考察法より導き來れる貨幣論は此直觀が尙ほ如何に擴く普及することあるも予は全然陳腐否な全然誤謬なりと見る。予は其直觀を常に金屬論的なりと表示し、從て金屬主義をそれ自身として論爭した。」更に「予の目的は金屬主義的見方を國家學的見方によりて代位せんとするにある」と(4)。クナップは漠然從來の貨幣論者を金屬論者と指示したるものなるも、而も「此表示は餘りに不確定にして、彼は擬制的な反對者に對して論爭せるに過ぎずとの非難に對しては反對せざるを得ない。蓋し國定學說中にて彼が提出したる反對を審かに檢せば、國定學說に明瞭に對立し且つ多數の學者及び實際家に於て事實上共通的に繰返へされたる根本的見解を發見するは困難ではない」(5)。彼等が價値尺度を金屬の一定量と考へ、貨幣の價値を內容金屬の價値と同一視したる點に於て、金屬主義として特標せられて名目主義に對照せらるることは充分承認することが出來る。

名目主義 Nominalismus 又は名目論者 Nominalist とは金屬主義又は金屬論者に對照して用ひらるゝ名辭にして非金屬主義の總てを包括するものである。リーフマンが「貨幣の價値を價値ある素材に遡て求めざる者の總てを名目論者と表示する」(6)と言へるは一部の消息を傳へて居る。アルトマンは貨

幣學說を分類して金屬主義、經濟的名目主義及び國家的名目主義の三派とした。然し予は先づ金屬學說と名目學說に大別し、後者は貨幣論考察の立場の差異より更に表號學說 Zeichenstheorie と計算單位學說 Rechnungseinheitstheorie に區別するを以て妥當なりと見る。蓋し最近リーフマンの貨幣新說の提唱せらるゝに及び名目主義の間にて、貨幣の本質は有形なる貨幣表號 Geldzeichen の內に或は抽象的なる計算單位の內に認むべきかの重大なる問題が提出せらるゝに至りたれば、アルトマンの主張するが如く名目主義を國家的名目主義及び經濟的名目主義に分類するよりも更に根本的な觀點より名目主義を分類するの必要を見るに至つた。クナップの國定學說及從來の經濟的名目主義は共に綜合經濟的觀點より流通行程に於ける貨幣現象を考察し、貨幣を以て價值單位を負擔して流通を媒介する有形なる貨幣表號なりと見るに於て共通なるに反し、リーフマンがこれと根本的に異なれる個人經濟的觀點より貨幣を考察し、個人經濟の費用單位、利用費用の計量手段たる抽象的な計算單位を貨幣なりと見るに及びては、予は先づ此の根本的な對照を基礎として名目主義を表號學說と計算單位學說に區別するの必要を認める。而も前者に於てクナップの法制的考察を章券主義、Chartaltheorie とし、從來の名目主義を指圖學說 Anweisungstheorie として對立せしめんとする。

今クナップの國定學說は名目主義的見解を貨幣學說として樹立したる根底をなし、指圖學說を代表せるベンデイックセンは此の名目的見解を基礎として經濟的完足を企てし第一人者なれば、クナップ及びベンデイックセンの學說に於て名目主義的見解を考究し、以て貨幣理論の範圍殊に貨幣の本質及び價值の問題に關する金屬主義と名目主義との對照を一瞥したい。

四

金屬論者は貨幣の本質を其内容金屬の内に認める。彼等は貨幣を構成する素材即ち金屬の内に其本質を認め、この技術的に充用し得る素材より出發する。從て貨幣の定義に於て既に金屬が本質的な特徴として撰ばれて居る、曰く貨幣とは支拂要具たるの職能を竭し國家が箇片の重量及純分に關して公證した箇片たる金屬なりと。次で何が貨幣なるかの問題に於ても彼等は價値完全なる金屬貨幣を固有の貨幣とし其他の貨幣代用物とこれを區別して居る。レッキシスは曰ふ『完全なる貨幣とは全價値を其素材の内に保持し、從て鑄潰しによつて地金屬に變化するも尙ほ全價値を有するものである。今かゝる眞正なる貨幣の外に貨幣の職能は竭くすもこの眞正の貨幣たるの理想に遠ざかり一般的に言へば素材的價値を有せざる支拂及購買手段がある。而して此種の手段を同樣に貨幣なる普遍的概念に包括する時は貨幣概念を正當に摑み且つ諸種の貨幣種類を理論的組織の中に整齊することが困難なれば、これらの手段は眞實の貨幣と區別して貨幣代用手段 Geldersatzmittel 又は貨幣代用物 Geldsurrogate と言ふ』と(7)。

金屬主義の透徹せる形式は貴金屬を終極に於て自己目的と見る。貴金屬が貨幣組織の終結として考へ得る唯一の可能な形式にして、此素材を内含せざる紙幣はそれ自身眞正の貨幣ではなく、只金に對する指圖、證券即ち、國家及び銀行の債務證券にして、金屬に兌換せらるゝことが終極に於て要求せられ、且この信用の基礎に於てのみ流通することが出來る。從てかゝる保障なき紙幣即ち强制通用力を有する不換紙幣は常に變則なる病的なる而して危險なる紙幣にて正當なる貨幣と常に區

別せらるべきものとして從來排斥せられて來た。

名目論者は貨幣の本質を其職能の內に認める。彼等は貨幣の技術的素材を貨幣概念に對して本質的のものと見ず、貨幣の本質を其職能の內に認め此職能より出發する。ベンデイツクセンは貨幣本質は現在吾々の國民に對して決定すべきを主張し、現在の經濟生活に於ける貨幣の地位より貨幣は今日の流通經濟にて如何なる職能を竭くすかを闡明した。彼は其經濟的職能より演繹して貨幣は自己の豫め社會に對して提供したる給付の根據に於て、社會より其の反對給付を請求する Legitimation なりと見た。彼によれば貨幣は金屬論者の說く如く交換財ではなく、單なる表號 Zeichen であり Symbol 象徵である。今日の貨幣經濟は貨幣による生產と消費、前給付と反對給付の個人的結合にして、貨幣は生產と消費を媒介し、個人が社會に對して提供する給付と此前給付を基礎として社會より請求し得る反對給付とを結合するを目的とする單なる Legitimation にして、是れを構成する素材的內容に關係なき單なる表號である(8)。

然らばベンデイツクセンは何を貨幣と見るか。彼は『經濟的に考察する時何がこの貨幣たる職能を竭くすか、流通は何を貨幣として承認するかによりて貨幣は定まる』(9)と言て居る。かくて彼はクナップが貨幣として見たる國定貨幣の外私的流通手段をも貨幣の內に包括した、彼は金屬貨幣紙幣、銀行券更に不換紙幣は勿論振替勘定も亦經濟上貨幣職能を竭くす限り同樣に貨幣なりとし振替貨幣 Giralgeld と命名した(10)。彼に於ては貨幣は價値單位を保持し支拂要具として流通する有形な貨幣表號にして只振替貨幣が經濟上有形な貨幣と同樣職能を竭くし得るを以てこれを貨幣と見做

したるに過ぎない。故に予はこれを貨幣表號學說と言ふ。

汎ゆる貨幣種類は貨幣職能を竭す限り貨幣として統一的に包括せられねばならぬ。金屬貨幣たると紙幣たるとに於て何等の差異を認むることは出來ない。勿論名目論者に於ても更にクナップと雖も金屬貨幣が價値完全なる延板より成るを排斥するものではなく、只延板の素材的內容は貨幣概念に對して本質的でなく無關係なりと主張するにすぎない。クナップは國定學說第一章第二節章券的支拂要具中に曰く『章券的制度は支拂要具の製造に貴重なる素材を用ふるを阻止せざるも、而も亦これを要求するものではない。如斯くこの制度は其目的の爲めに金屬使用を排斥せざるも、而も總ての他の材料を同樣に承認する。而してこは章券性の爲めに支拂要具の概念が素材より獨立するに至りしが爲めに起る。章券的制度は廣き體制にしてその內部にては貴重なる素材より成る支拂要具は全然重要ならざる素材よりなるものと同樣に可能である』(11)更に、『貨幣は常に章券的支拂要具を意味し、總ての章券的支拂要具を貨幣と稱する』(12)、と。此の貨幣概念は金屬貨幣たると紙幣たるを問はず汎ゆる章券的な支拂要具包括する上位の概念にして、兩種類は只發生的原因を異にする爲め貨幣概念中にて區別せらるゝも、而も貨幣たるに於ては論理上全然同樣に正當視せられねばならぬ。クナップは金屬論者が紙幣の流通は兌換性に基くと主張するに反對し紙幣は金貨を約する債務證券に非ず、其利用は信用に基くものに非ざるを(13)と主張し、更に曰ふ『金屬論者は紙幣經濟に於ても尙ほ正貨が主要なる種類なりと主張する。この正貨が背後に豫備的に存し、而も隱密の中に働いて居る、若し然らざれば實際に關する觀念を得ることは出來ないと。然し章券論者はこの

點を承認することは出來ない。勿論この場合以前本位的なりし正貨は尙ほ存在せること、換言すれば箇片の殘存するは疑なきも、而もそは隱れても働きを繼續することなく本位的貨幣としては活動を停止して居る。今や銀行券は全く眞實の貨幣、何物によりても補助せられざる本位的貨幣 Valutarisches Geld である。人々はこの觀念に慣れなければならぬ。これ要樞にして、理論家は「かくあり」との現實を考察し實際家は「かくあるべし」との理想に就きて考慮する』(14)。實に紙幣本位に對する見解に於て金屬主義と名目主義とは截然たる對立を表はして居る。而してこの紙幣經濟の現象こそは金屬主義を蹉跌せしめし暗礁にして、クナップの名目主義を擡頭せしめし試金石であつた。(15)

五

貨幣論上に於ける金屬主義と名目主義との對照は貨幣の價値の解釋に於て最も峻然たるものがある。『從來の經濟學に於て價値論が全經濟學說の中心に立ち種々の方向の主要論點及び主要對照を構成したるが如く、貨幣論にても貨幣の價値の問題は總ての問題の中心點に立ち種々の方向を區別する特質をなして居る』(16)。而して價値單位及び貨幣の價値と金の價値との關係に對する見方に於ける差異が兩主義を區別する要樞である。

金屬論者は價値單位を金屬の一定量なりと定義し、貨幣の價値は金の價値より導かるゝ固有價値なりと考へて居る(17)。金屬主義は價値單位は鑄貨法に現はれたるが如き一定の鑄造せられたる金

屬量として考へ、抽象的觀念として考ふるものではない。彼等は價値尺度なる名辭を用ひ金屬のみが只價値を測定することが出來、而して一般的價値尺度たるが爲めに貨幣は固有價値を具へざるべからずと結論する。

名目論者は價値單位の名目性を說く所に於て其根本的特徵を表はして居る。而して此の價値單位の名目性はクナップの國定學說の前提的要件にして、貨幣本質に關する彼の名目的見解は價値單位の名目性を前提して初めて可能である。彼は國定學說第一章第一節に於て價値單位の名目性を立證し、『價値單位は今日最早や金屬の重量として定義することは出來ぬ、そは只先行の價値單位に對する遡行的連續によりて歷史的に定義せられ得る法律的概念である』と高調する。而もベンデイックセンの認むる如く『此新學說の大なる意義は金本位國に於ても亦價値單位は名目的なりとの命題に存して居り』(18)、且つかくの如く支拂取引にて金屬貨幣の授受せらるゝと否とを同一視して區別せず、價値單位の名目性を金本位國と紙幣本位國とに於て異にせざるを主張せる點にこそ名目論者の所以が存して居る (19)。クナップは次の如く言ふ『眞實の紙幣の場合に於て價値單位を金屬量として定義することの不可能なるは既に明である。然し驚くべきは支拂要具が貨幣なる場合には卽ち章券性を有する場合には一般に價値單位を金屬量として定義することは不可能なることであり、……最も奇とすべきは金屬秤量制度に於ても亦今迄と異なつた金屬が撰定せらるゝや否や價値單位の概念は前の金屬より獨立する卽ち技術上金屬より解放せらるゝことである。蓋し價値單位は常に歷史的概念である』(20)

金屬論者は貨幣の價値と金屬の價値とを同一視し、貨幣の價値は自然に淵源する卽ち價値を有する素材（今日にては金屬）に由來するものなりと主張する。從て彼等は金屬貨幣の價値安固なるは貨幣の價値の基礎たる金の價値がそれ自身の性質上不動確固なるが爲めなりとし、遂にかくて貨幣の價値安固を保障するとの理由より金本位制を推擧するに至つた。

クナップは所謂貨幣の價値の問題は國定學說の考察の範圍外に立つものとして顧みなかつた(21)。通用力 Geltung 換言すれば貨幣箇片が幾何の價値單位を保持するかの問題に就き彼は公布的通用力なる原則を高調し秤量的通用力に對照せしめ茲に貨幣章券學說を樹立した。貨幣を國家法制の認定する章券的支拂要具なりと見るクナップが、貨幣に通用力を賦與するものは國家の公布 Staatliche Proklamation なりと主張するは當然である。彼は素材的內容に關係なく支拂要具の章券性を前提とするを以て足るを明にし、國家が貨幣に幾何の價値單位を負擔せしむるかは一に全く公布の權威に基き素材的內容の拘束を受けざるを主張する。彼は支拂要具の發生的考察により章券的支拂要具を發見し、更に貨幣の發生的考察により章券的箇片の自生的性質 Autogenität を發見し『章券的箇片は今尙ほ實材發生的 hylogenisch たり得べしと雖も又自生的 autogenisch たり得べし』(22)と說く。

貨幣と金屬の關係に就きては國定學說の說く所詳細を極めて居る。吾々はその相場的關係 Dromische Beziehung des Geldes zum Metall に就て彼の說く所を聽きたい。彼は貨幣の內容を構成する金屬の價格確定はその金屬自身の性質にして貨幣の價値は此の金屬の價値に追從するとの金屬論

者に反對して、實材的金屬の價格安固は國家の特別なる支拂行政の結果なるの旨を明に主張してゐる。クナップの章券學說は曰ふ『實材金屬の價格は只 ex institutione に確定せらるゝに過ぎずして決して ex definitione に確定せるものではない』(23) 然らばその確立は如何にして付與せらるゝか。クナップは答へて曰ふ『支拂要具の行政は時として一定の金屬に確定の價格を付與せんとの意圖を有し、且つ Hylodromie 實材相場制と稱すべき特別の方策によつてこの目的を實現する』(24)。而して此の實材相場制は實材金屬の價格の意識的確立にして、實材金屬の價格に對する上位及び下位の確定的限界の意識的設立である。而してこの上下の價格限界を確定せんが爲めに實材獲得制 Hylolepsie 及び實材現示制 Hylophantismus なる二つの手段が要求せられる。かく二補助方策によりて實材相場制は成就せられ、かくて初めて今日金が確定の價格を有つに至つたものであると。

ベンディックセンはクナップが所謂貨幣の價値の問題に觸れざりしは正當にして、論者の多くがクナップの立場を理解せずして不當なる批難を加ふるを難じたる後言ふあり『貨幣の價値に關する問題は金屬主義への逆轉である。かゝる問題は貨幣と金とを同一視し汎ゆる取引を財と金屬との交換なりと考察する限りに於て意味を有つて居た。然し貨幣が抽象的な價値單位を保持する表號なる今日に於てはかゝる問題は何等の意味を有たない。又若しこの價値を購買力の意味に解するならばそは物價を論ずるものにして Geldwert を論ずるものではない』(25)。

ベンディックセンは價値單位の名目性に對するクナップの所說に全然同意を表し、且つこの見解の上に自己の貨幣論を築かんと企てた。而も彼はこの價値單位の名目性の理論が、今論ずる貨幣の

價値と金の價値との關係に對する正當なる見解に對しても重大なる意義の存するを認めて曰く『從來貨幣の價値を金より導き來り、貨幣の價値と金の價値とを同一視し且つこの前提より貨幣の價値を交換財として決定し說明した。然るに價値單位が單に名目的なるの認識を以てす時貨幣の交換財たるの全性質は否認せられる。且つ同時に金は中心點及び總ての財の尺度たることを中止する。かく金の價値安固は人々の從來信じたるが如くその自然的性質に基くものにも又人が金を確定の單位として總ての價値を金にて測定せんとすることにも基くものではなく、單純に國家がその法律的制度によりて金を確定の價格にて購入し販賣するの事實を基く。かく貨幣は金よりその價値を有するのではなく、金が貨幣換言すれば貨幣制に對する法律的規定よりその價値を有つ。』彼は更に語を續けて『價値の體系の直觀に對しこの認識は完全なる轉換を意味する。從來人々は恰も確定せる不變の中心點の如くに金の周圍を廻りて汎ゆる價値を認めた。然るに今日その欺瞞なるを知る。實際の價値は觀念的中心點なる名目的價値單位の周圍を運動し、只人爲的にこの中心點に金を結合するにすぎない。故に若しこの結合を解き金本位國に於て金の自由鑄造制が廢止せられたる時は、價値は更に名目的價値單位を廻りて變動するも、解放せられたる價値としての金は他の價値と同樣の運命に遭遇して需供の關係に支配せられる。茲に於て人は惑星系の中心を地球より太陽に移し且つ彼の學說が實證よりも外觀に支配さるゝ人々に同意せられざりしコペルニックスの光景に想到する。それにも拘らず地球中心的な世界觀の運命は征服せられた。而して同樣に外觀の欺瞞に基く金中心的な價値觀はこの下界に於て同一の運命を見なければならぬ』(26)と。

六

經濟學上に於ける演繹及歸納の兩研究方法の可否の論は既に過去に屬し、今やこの二種の方法は學理の成就に到達する道筋に於て相互に補助し提携すべきものなることが一般に承認せらるゝに至つた。併し經濟上の事實は複雜錯綜し且つ其現象は進化變遷して已まざるものである。從てかゝる經濟現象に關する眞理の發見の爲めには、推論の前提をなす假定の撰擇を誤り事實に適應せざる學理を導くことあらんを避け、經驗觀察を基礎とするの必要殊に大なるものがある。かくて個々の現象を觀察して得たる事實を前提として其内に普遍を見出し、諸現象を經濟學の根本概念に關係して組織的に整齊して遂に獨立なる學說を成就せねばならぬ。

貨幣論の研究に於ける態度もこれと同一であらねばならぬ。貨幣論に於ても二研究方法を區別することが出來る。一は現在の貨幣現象を直接に觀察して獨立の直觀を得これを基礎として學理に到達せんとし、他は經濟理論の體系を基礎とし其一般的假定を前提として貨幣の本質に關する理論を發展するものである。而して貨幣論上に於ける金屬主義と名目主義の對立はこの研究方法の相違に基く結果である(27)。事實の觀察より得たる直觀を前提とした者は貨幣制の内に名目的な本質を認識し、從來の經濟理論の基礎に立つ演繹方法は必ず金屬主義的見解に歸着せねばならなかつた。今日の貨幣現象を說明し現實の貨幣制を認識するの使命を有する貨幣學說を成就するに於ては、眼前に存する現象を觀察し現存の貨幣制に就きて得たる生きた直觀を前提とせねばならぬ。此基礎に於て成就せられたる名目主義にして初めて經濟上の事實に適應する正當なる學理たることが出來る。

リーフマンは此事情を正當に認め且つ雄辯に語て居る。彼は貨幣が久しく不可解の謎として學者を惱したるは從來の經濟學が唯物的見解の宿痾に禍せられたるが爲めであると喝破し、經濟理論一般に於て唯物的數量的見解の普及する限りこの基礎に立つ貨幣論が金屬主義の謬に陷るは免るべからざる歸結なりと主張する。而して又彼は偶々經濟理論の包括的基礎なくして個々の現象の內に貨幣の正當なる本質を認めし名目主義は組織的基礎なき爲め學理としての權威なくして終るを免れないと論じて居る。かくしてリーフマンは金屬主義の誤謬を免れ名目主義の直觀に組織的基礎付けを與へんが爲め根底に遡て傳統的な經濟理論を訂正せんとした。而して彼は經濟に對する心理的見方及び經濟現象に對する個人經濟的考察を前提として心理的經濟學理を樹立し、此基礎の上に貨幣計算單位學說を主張するに至つた。

然し乍ら名目主義はリーフマンの貨幣新說によつて完全なる基礎付けを得たものではない。蓋し名目主義的見解は彼の心理的經濟學說によりて只貨幣現象の個人經濟的方面に於ては理論的基礎を與へられたるも、其綜合經濟的方面に於ては未だ理論的基礎を築かれたものと言ふことは出來ない。かくて名目主義は今や流通經濟的方面に於ける組織的完成を要求せる切なるものがある。

貨幣論上に於ける金屬主義と名目主義は最近著しき對照を現出した。正統的經濟理論の基礎に安泰を夢みつゝありし金屬主義は遂に不斷に進化する經濟現象の試練に失敗し、名目主義は一般的承認を贏得るに至らざるも既に眞理の試みに堪へた。庶幾、經濟理論の傳統的體系の一般に普及せる限り尙、前者の路は濶く其門は大でありこれより入るものは多く、後者の路は窄くその門は小さく

其路を得るものは少である。併し既に沈淪に至る路は濶く命に至る路の窄きは明にせられてゐる。貨幣論上の二途、時代の寵兒たるの榮譽を捨てゝ敢えて反逆者たる途を撰びしクナップ及びベンディックセン等は窄き門より入り小き路を辿りたるも遂に命の殿に到達するの日が來た。

ベンディックセンの一周忌に際し尊敬と同情を寄する異國未見の彼に捧ぐ。を追懷して（一九二一年七月二十九日）(28)

註(1) Bendixen, Dr. F. Währungspolitik und Geldtheorie im Lichte des Weltkriegs. 2 Aufl. 1919. S. 120.

註(2) a. a. O. S. 120.

註(3) Dalberg, R.—Die Entwertung des Geldes. 2. Aufl. 1919. S. I.

註(4) Knapp, G. F.—Staatliche Theorie des Geldes. 2. Aufl. 1918. Vorwort S. VI ff.

註(5) Moll, Dr. Bruno.—Logik des Gelbes. 1916. S. 31.

註(6) Liefmann, R.—Geld und Gold. Oekonomische Theorie des Geldes. 1916. S. 111.

註(7) Lexis, W.—Die Knappsche Geldtheorie. (in den Yahrbücher für Nationaloekonomie und Statistik. 32 Bd. 1906)

註(8) Bendixen.—Das Wesen des Geldes. 2. Aufl. 1918. S. 26 ff.—Wähnungspolitik und Geldtheorie. s. 148. 拙稿、貨幣國定學說梗概、國民經濟雜誌第二十八卷第三號

註(9)、(10) Bendixen.—Wesen des Geldes S. 15 ff. u. 42 ff.—Geld und Kapital, 2. Aufl. 1920. (Fünf Yahre Geldtheorie und Geldbegriff.)

註(11) Knapp.—a. a. O. S, 33.

註(12) Knapp.—a, a. O. S. 33.

註(13) Knapp,—a. a. O. S. 31. 42ff., S. 119 ff.

註(14) Knapp,—a. a. O. S. 132

註(15) Knapp,—a. a. O. S. 287.

註(16) Liefmann,—a. a. O. S. 110.

註(17) 山崎覺次郎博士改訂增補貨幣銀行問題一斑一一〇頁參照

註(18) Bendixen,—Wesen des Geldes. S. 10.

註(19) Bendixen,—Geld und Kapital, S. 73 (Vom theoretischen Metallismus 脚註金屬論者は誰か」參照)

註(20) Knapp,—a. a. O. S. 9.

Derselbe, Die rechtshistorischen Grundlagen des Geldwesens. (Schmollers Yahrbuch, Bd. XXX 3 Heft, 1906) 參照

註(21) Knapp,—a. a. O. §. 24· Ueber den sogenannten Geldwert. S. 434ff. Derselbe, Erläuterungen zur Staatlichen Theorie des Geldes. (Schmollers Yahrbuch, Bd. XXX 4 Heft, 1909) 參照

註(22) Knapp,—a. a. O. S. 31.

註(23) Knapp,—a. a. O. S. 80.

註(24) Bendixen,—Geld und Kapital, S. 30. (Vom Geldwert.)

註(25) Bendixen,—Geld und Kapital, S. 4ff. (Fünf Yahre Geldtheorie.)

註(26) Bendixen,—Geld und Kapital, S. 76ff., (Vom theoretischen Metallismus.)

註(27) Liefmann,—Geld und Gold. Derselbe,—Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. II Band. 1919. 7 Teil. C. Das Geld.

註(28) Elster, K.,—Die Seele des Geldes, 1920. (Friedrich Bendixen zugeeignet) Vgl. Das Naehwort auf S. 371.